
太陽になりたかった花

昼寝日和

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

太陽になりたかった花

【NZコード】

N2271M

【作者名】

昼夜日和

【あらすじ】

花は思つた。

なぜわしは太陽ではないのかと。

花は思つた。

なぜわしは太陽ではないのかと。

日の出から日の入りまで真正面から太陽と向かい合い続ける花は、いつしか思うようになつていていた。

太陽について最もよく知つてゐるのはわしだと。いや、下手をしたら太陽よりもわしの方が太陽のことを知つてゐるかも知れない。なにせ自分自身のことは、内側からはもちろんのこと外側からも見てみないとわからぬものなのだから。太陽は決して太陽のことを外側から見ることが出来ない。だからきっと、輝きが強すぎて見ているものの目をチカチカさせてしまつてしまつてゐることに気がついていいのだ。

わしならもつとうまくやるのに。

花は太陽から田をそらし、きれいに晴れわたつた青空を眺めながら考えた。

わしならもう少しだけ光を弱め、太陽を見つめ続けなくてはならない花たちがもつと楽になるようにするのに。そうしたら花たちはこんなに無理をして花びらに色を集めなくてすむようになり（なにせ目がチカチカしてしまるので、わし自身もそうだが、濃い色をつけなければ自分が何色であるのかわからないのだ）、もつと優しく色づくことができるようになる。

しかし、そんなことをしたら空はこんなにきれいに青くならなくなつてしまふのだろうか。いや、そんなこともないだろう。空はがんばつて青に染まつて晴れわたるに違ひない。なにせ空は青がお気に入りなのだから。

花は強く思つた。

わしこそが太陽に向いてゐると。

しかし花は太陽ではない。太陽は遙か遠くの方でさんさんとしている。

なぜわしは太陽ではないのか。

花は思い切って通りすがりの若い蟻に尋ねてみる。だが、まったく相手にされなかつた。若い蟻は今しがた見つけた蝉の死骸に興奮しきつていて、仲間を呼びに巣穴へ戻る途中だつたのだ。もちろん若い蟻の事情などいっさい知らない花は、若い蟻に無視をされたのだと思い、機嫌を損ねて花びらの色を強めた。

なぜあの蟻はわしの話に耳を傾けないのだ。

花がそんな風に思考している間にも太陽はさんさんと輝き、花はそれを真正面から見ている。

風がそよりと吹いた。そこで花は若い蟻にした質問を風にも繰り返す。

風は困つたようにホロと涙をこぼしたが、それだけで何も言わない。風は己が風であるということに疑いを持たず、（かの人魚の姫がそうだつたように）神様からの試練である三百年の年月をまつとうすることに集中しているのだ。そのため、なぜ花が太陽ではないのか、考えたこともたなかつた。

何も答えてくれない風に対し、花は苛立ちをつのらせてますます花びらの色を濃くしてしまつ。

「ああ、わしはどうして太陽ではないんだろうか。今すぐにでも太陽になつて、太陽よりも太陽らしくふるまつてみせたいものなのになあ。このまま待つていれば太陽になれるのかもしかんが、例えそうであつたとしても、太陽でないのならばいっそのこと花もやめてしまいたいなあ」

ちょうどその時、一人の人間と一匹の犬が通りがかつた。

「なんて美しい色の花なんだ。ぜひともおらの家で飾りたいものだ。

花よ、おらの家へ持つて帰らせてくれ」

人間が言うと、犬もわんわんと吠えた。

「いや、人間。わしは花をやめて太陽になりたいんだ」

「ならばおらの家で切り花になつて、それから太陽になればいい」

花はちょっとと考えてみた。切り花とは一体どんなものなのだろう

かと。

しかし犬がうるさく吠えるので、花は考え方事に集中できない。人間は考え方続ける花の答えを待たずに、花を摘み取ってしまった。

「人間よ。わしは切り花になつてからでも太陽になれるものなのかな」

摘み取られた花は人間に尋ねた。

犬はあいも変わらず吠え続けている。

「もちろん。切り花になつたつて太陽ぐらいにならなれるさ」

人間は摘み取った花をうつとりと眺め、心ここにあらずといったふうに答えた。

花は摘み取られてしまつたため、茎から栄養分を吸えず、だんだん苦しくなつてくる。

犬は尻尾を強く振つて吠え続けていた。

「人間よ」

「なんだ」

人間は鬱陶しそうに相槌を打つた。

「わしはどうして太陽ではないのだ。そして、わしはどうすれば太陽になれるのだ」

「なんだそんなこと」

なんだそんなこと、簡単ではないか。太陽はずつと上にあるのだから、おらが上方にぶん投げてやれば、花はずうつと上に飛んでいつて太陽になるに決まつていて。

人間はしかし、面倒に思い最後までは言わなかつた。かわりに、わんわんと吠え続ける犬をにらみつける。

「おいこら、さつきからうるさいぞ。静かにしろ」

しかし、犬は静かにしない。

怒った人間は、手に持っていた花を犬にくわえさせた。

「これでいい」

黙つた犬を見て人間は満足そうに咳く。

犬にくわえられた花は茎の一部が押しつぶされてしまい、ますます苦しくなつてしまつ。

「じゃあ、おらの家へ行くとしよう」

人間は足取り軽く歩き始めた。犬も尻尾を振りながらその後に続く。

花は思つた。

切り花とは一体何なのだろうかと。それから、『わしはどうして太陽ではないのだ。そして、わしはどうすれば太陽になれるのだ』という質問に対し『なんだそんなこと』と言つていたが、この人間はわしの疑問の答えを知つてているのだろうか。

人間はのしのし歩いてゆく。

花は苦しかつた。

茎から栄養分を吸えない、それだけではなく、犬が口をむにむにと動かすたび茎の纖維がぐちゃぐちゃになるし、犬がトコトコ歩くたびに花びらがぐわりぐわりと大きく揺すられ、散つていつてしまつ。

「なあ、人間よ」

ついに花は耐えきれなくなり、人間に話し掛けた。

「なんだ」

人間は足を止めずに言つた。

その瞬間、今までおとなしく歩いていた犬が激しく首を振り回した。人間の声を聞いて無性にうれしくなつてしまつたのだ。

犬は花をぶんぶん振り回し、はしゃいで人間の周りを駆け回つた。そのため、花の茎はあちこち折れてしまい、花びらは半分以上散つてしまつて残つたものもぼろぼろになつてしまつ。

人間は顔をしかめた。

「おお、こいつはしまったな。せつかくの花が台無しになっちゃった」

「犬がおとなしくなるのを待つてから、花は息も切れ切れに訴える。悪いがもつと丁寧に扱つてはくれんかね。わしはもうへとへとだ」

「ああ、なんて辛氣臭い」

人間はがつかりしてしまった。きれいな花を見つけたと思ったのに、今日の前にある花は死にぞこないの、ただつまらないだけなのだ。

「ああ、なんて無駄なことをしてしまったんだろう。もう少しで口ミにしかならないものを持つて帰るところだつた」

人間は犬に口を開けるよう指示する。犬がそれに従うと、花はボトリと地に落ちた。

太陽は少しづつ傾いているが、それでもずっと上にある。

「人間よ。切り花とは一体何のことで、わしはどうすれば太陽になれるのだ」

花は力いっぱい大きな声を出して尋ねたが、人間も犬もさつさと歩き去ってしまった。

取り残された花は、地に横たわつて考えた。

なぜわしは太陽ではないのかと。

花はとてつもなく疲れていた。太陽は上からあたたかな光を降りそそいでいるのだが、摘み取られてしまつたため太陽を見つめることができない。

土の中から顔を出して以来、花が太陽のことを見つめることができなかつたのは日没後と曇りの日と雨の日くらいのものだつた。雨や曇りの日であつても、花はずつと空を見上げていて、いつもだつたらあの辺りに太陽がいるのになあと思考をめぐらしていた。

しかし、摘み取られてしまつた花は今、太陽どころか空を見上げることすらできず、異常なほど近くにある土を眺めていた。

なぜわしは太陽ではないのか。

土の上を歩く通りすがりの年老いた蟻にこの疑問をぶつけてみるが相手にされなかつた。年老いた蟻は耳が遠く、目が悪かつたために花の言葉は届かず、そもそも花が近くにいるということに気がついていなかつたのだ。花は機嫌を損ねるかわりに、孤独を味わつてしまつ。

太陽はずぶずぶと沈み始めていた。

風がふわりと吹いたので、花は、今度は年老いた蟻にした質問を風にも繰り返す。

風は困つたようにホロと涙をこぼしたが、それだけで何も言わなかつた。

風の涙を見た花は、非常に悲しくなつてしまつ。

「ああ、なんでわしは太陽ではないのだろうか。太陽ではないだけではなく、わしはもはや花ですらなくなつてしまつているんだろうなあ。太陽でも花でもない今のわしは一体何なのだろう？」

太陽が完全に沈んでしまつた。かわりに月がひょっこりと顔を出している。

花の嘆きを聞いた通りすがりの人間が近づいてきた。

「どうかしたのか」

人間は花の残骸に向かつて尋ねる。

「考え方をしているのだ。なあ人間よ、わしはなぜ太陽ではないのだ？」

花は何度も言つてきたことを再び繰り返した。

「お前は

なんだ？」

人間は花に問いかけた。

「わしは花だ。いや、花だつたものだ。今はもうこんな姿になつてしまつて花には見えんかもしけんが、わしは確かに花だつた」

花は答えた。

月の光が、やわらかくあたりを照らす。

人間は花の近くに腰を落ち着けると、火をおこす仕度を始めた。

「そうか。ならばお前が太陽ではない理由は、お前が花だからだ」

花は驚いた。確かに花は花だ。しかし花は花だが、花が太陽にならないのはなぜなのか。

「花は太陽ではない。花は、最初は種で最後は枯れて土にかえるだけだ」

「しかし、なぜ花は太陽にはなれないのだ？」

「それは、お前が生命をもち、地に根をはり、地から離れることをせず、地から放たれることもできないからだよ」

花は混乱した。人間はさも当たり前なことを言うように当たり前なことを言つたから。そしてそれはあまりにも当然すぎて誰も花に教えてくれなかつたことだつた。

「たつたそれだけの理由でわしは太陽ではないのか」

「そうだ、たつたそれだけの理由だ」

バチバチという音とともにあたりが明るくなつた。火がゆらりとする。

花は考えようとした。しかし何をどう考えたものか花にはわからなかつた。

「なあ、人間よ」

「なんだ」

花は少し黙つた。話しかけたはいいが、何を言えばいいのかわからぬのだ。

人間も何も言わない。

火だけがバチバチと音を立てている。

「人間、こんなところで一体何をしているのだ」

「旅をしている。いや、今は火を見ていいだけだ。近くにある村に立ち寄つてみたのだが、よそ者だという理由で追い出されてしまつた」

「旅とは何だ」

「さあ、わからん。わからんから旅をしている」

満天の星空の下で花は人間に、花についてのことを話したいと思つた。

気がついたら土に抱かれていたこと。そのころはまだ花ではなく、茎や葉や根っこすらなかった。土に抱かれながら、夢をみたりはつと目覚めたりを繰り返していたのだ。人間にはわからないのだろうが土の中の暗闇は心地よく、そこでみる夢もまた心地よいものであった。

ある日体がむずりとしたかと思うと、わしから根がのびている。すると前よりも目覚めている時間が長くなつた。土の中の暗闇は心地よかつたが、根がのびればのびるほど目覚めている時間が長くなり、わしは暗闇に飽きていつた。

もつと違う世界があるはずだ。今とは違う所へ行きたい。そう思い始めるころにまた体がむずむずして、気がつくと土から抜け出していた。

土から抜け出したあともわしはぐんぐん成長した。どんどん土が下の方へゆき、わしはいつだつて太陽を見つめていた。いつもいつも。太陽がのぼってしづむまでずっと見つめていた。気がつくとわしは花を咲かせるようになつていた。

わしは夢中になつて太陽を見つめ続けた。なにせ土の中とは正反対の光のかたまりがめずらしかつたから。

いつしか、わしこそが太陽に向いていると思うようになつていた。太陽でないのならばいつそのこと花もやめてしまいたいなどと。土の中から出でてくることができたし、花を咲かせることもできたのだから、太陽にだつてなれるのだと思い込んでいたのだった。

花は時間を追うごとにしおれていく。

人間はゆらゆらとおどる火をぼんやりと眺めていた。

花は人間に話しかけようかどうしようか悩んでいる。

月のやわらかな光と、火の熱がこもつた光が混じり合い、夜を演出

している。

いたずらな夜風が火にじやれついた。大きく火がゆらめいて、し
おれた花をまきこみ、花はバチバチと燃えた。

花は燃えながら思つた。土の中とは正反対だと。目の前が白くな
つたり赤くなつたりして、苦痛だつた。

興に乗つた夜風がさらに激しく火にじやれつく。

火は夜風に吹き消されてしまった。

すつかり灰になりはてた花は思つた。

いざれわしは土の肥やしになつて、土と同化するのだろうと。そ
れから土になり、そのうち花も茎も根つこもない種を抱き込むこと
になるだろうと。

そしてそれもまた、最後には土にかえるのだろう。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2271m/>

太陽になりたかった花

2010年10月8日13時16分発行